

# 清流

題字：芳野 充

令和3年6月30日  
第54号

発行所 加来不動産(株)  
発行者 加来 寛  
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに  
静かに  
清流のように

## 受けた恩を次へ送る

先代（母親）が生前、わたしにのこした口伝のようなもの一つに、次の言葉があります。「受けた恩はかならず返しなさい」。この言葉の背景には、本当に貧しかった加来家を救ってくれた、ある家主さんの話があります。

昭和五十二年一月に個人事業として、両親が『加来開発』（現在の加来不動産）を創業しました。この年にわたしも生をうけました。時代はまだバブル景気前。強面で口下手な父親は外回りは苦手だったようで、母親が当時赤子だったわたしをおぶって、くる日もくる日も家主さんへあいさつ回りをしていたそうです。しかし何のつてもなくはじめた不動産業です。からなかなか仕事にありつけず、また仕事があっても困っている人からお金をいただくかないというスタンスでしたので、わたしの記憶では小学校低学年のころまで我が家はいつも火の車、ときには小さかったわたしがお米を知らぬ人や教会にいただきにあげていました。

いよいよ生活に困窮した両親は、ある年配の家主さんをたずね三百万円ほど貸してほしい、とお願いにあげたそうです。するとその家主さんは「無担保無利子のあるとき払いで良いから」と、何も聞かずにポンと貸してくださいました。このお陰で今があります。

両親が亡くなったあと、その家主さんと話をするなかで「あんたのお母さんには絶大な信頼をよせていた。だから本当はお金は返さなくていいと言ったが、『それは困る。必ず返します』と言って、時間をかけて利子までつけて返してくれた。本当に立派なお母さんやった。」と、うれしそうに話をしてくださいましたことを思い出します。

品性豊かにするための「二十の徳目」の十一番目は、「義理」です。「義理」とは、お世話になったことを忘れず礼を尽くすこと、です。

六月十五日は加来不動産の創立記念日です。この日は会社を創業し、引き継がせてくれた先代のお墓にスタッフ全員で参ります。また、お金を貸して下さった家主さんはずでにこの世をさっているため、そのお墓に全員でごあいさつに伺いました（来年からは夫婦だけで参る予定）。

いまお仕事させていただけるのは、先代のお陰であり、その先代を支えてくださったおおくの方々のお陰です。いまだに恩を受けることがおおいわたしですが、直接返せる方にはキッチンと恩を返し、直接返すことがおぼろしい方には、わたしが受けた恩を次へ送るように意識しています。それは次世代の子どもたちや地域社会、自然環境に対してです。受けるばかりではバチがあたる。受けた恩をすこしでも次へ送る「恩送り」を、時間をかけておこなっていききたいと思えます。

加来 寛

